

## 歴史を紐解く喜び

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

今年4月に川口基督教会に赴任してから、ちょうど5か月となりました。前任者の方々からの引き継ぎが終わってから、ある程度予想はしていたのですが、まるで怒涛のような日々を過ごしております。そういう中で、赴任当初から自分と約束したことがあります。それは、旧会館1階にある主教室兼歴史資料室の整理整頓のことです。150周年委員会でも課題の一つとして掲げていることです。とにかく、私にとっては牧師の立場から川口基督教会の150年という長い歴史の重みと深さを感じながら、少しでもその中身を確認するための試みでもあります。

初代牧師のぬくもりが残っている書籍や歴代の教会委員会の議事録、週報と教会報、信徒名簿や古い写真、昔の新聞や雑誌の記事、数々の印刷物や記念品などなど、すべてが勉強の素材になります。とにかく年度別・類型別に分類することから整理し始めましたが、各々の内容を垣間見ようとカバーをめくると、その中身に目がとどまり、中々作業が進みません。例えば、「創立140周年記念文集～み手の中で」を見つけて、読み始めています。案の定、すぐ前任者の諸先輩の声に浸ってしまいました。中でも最近ご逝去されたミカエル村岡明司祭の文章に深く共感すべきところがありました。「大阪教区出身ではなく川口育ちでもない私が当時、宣教100年の歴史を持つ川口基督教会の牧師として1970年より用いて頂くことになったのは、1879年に名出保太郎司祭が初代の邦人牧師に就任されて以来、初めてのことであったし、川口教会の歴史に異例な時代を差し挟んだことでもありました」（記念文集9頁）。村岡先生がそう感じられたほどならば、日本育ちでもない私が現在、川口基督教会の牧師であるというのは、いうまでもなく、もう一つのさらなる異例な時代と言えます。この文章からもう一つ、次の記録を見つけました。「当時の行事で私の記憶に残る出来事は…1971年に李主教以下、大韓聖公会ソウル教区の親善訪問団を迎え、共に祈り交わりを深めたことも忘れ得ない出来事でした。」（同10頁）なるほど、川口基督教会はかつてこのような韓国聖公会との交流をも持っていたのです。私はこの李主教より1976年に堅信を受け、司祭になってからも連絡を取り合ったことがありました。

これから、資料室の整理という約束を果たそうと思いますが、少し時間がかかることでしょう。しかしながら、整理そのものよりは、それらの歴史資料にこもっている諸先輩の思い、祈りと宣教への情熱を掘り起こし、そこから学ぶ貴重な喜びの時間にしていきたいと願っています。